

明けましておめでとうございます。

メルマガ読者の皆様におかれましては、希望に満ちた新年をお迎えのことと存じます。本年もどうぞよろしく願いいたします。

コロナ禍の中で、初詣の自粛や分散参拝、帰省の自粛などが求められるなど、異例のお正月となりました。毎年300万人以上が初詣に訪れている明治神宮では人出が75%も減少したとのことです。せっかくコロナ禍の収束祈願に詣でも、人混みの中でコロナに感染したらかえって大きな厄を背負い込むようなものかもしれません。

私も人混みを避け、例年通り、地元にある菩提寺にお墓参りなどしながら、コロナ感染の収束を祈願しました。1月7日には「緊急事態宣言」が再び発出される事態になりましたが、一日も早い収束を願うとともに自らを律して行動しようと思いました。

今年いただいた年賀状にも、多くの方が賀詞に加えてコロナ感染収束について書かれていましたが、これも今年の特徴だと感じました。それに加えて、近年は、「年賀状でのお付き合いは今年で失礼いたします」などと書かれた、いわゆる「年賀状じまい」をなさる方がみられるようになりました。

「年賀状じまい」については、ネット上でも、「義理で増えていった人間関係を整理できる」とか、「年賀状を作成する手間や費用を節約できる」といったことなどが書かれています。小生が年賀状をやり取りしている相手方には年齢の高い方も多いので、そうした事情も理解できます。年賀状には様々な考え方があるでしょうし、自分自身でも面倒に感じることはありますが、それでもふだん何のやり取りをしていなくても年賀状一枚で細く長く交誼を結ばせていただいた方（義理ではなく）と「年賀状じまい」で切れてしまうのも寂しいなと思っていました。

そうしたところ、中学時代からの友人が、年賀状に「一度会いたいものです 連絡先です」と書いて電話番号を添えてくれました。ありがたいきっかけだと思い、すぐに電話を入れてみたところ、友人も喜んでくれて、35年ぶりくらいの会話となりました。コロナ禍ですぐに会えないことが残念ですが、再会を約束できて、新年早々晴れやかな気持ちになりました。そこで、まだ年賀状は続けていこうと思いを新たにさせられました。

もっとも、年賀状の発行枚数そのものは年々減少しているようで、「2021年度用お年玉付き年賀はがき」の当初の発行枚数は約19億4,000万枚で過去最低となる見込みであると報じられていました。年賀状の宛名書きも半分以上はプリンターが使用されている時代ですから、便利さが優先され、様々なSNSも活用されるのに伴い、年賀状離れが進むのは時代の流れのようにも感じます。

それでも長年に亘って築かれてきた交誼そのものは、ある意味、人生における「ご縁」であり運命的な繋がりだと思いますので、通信手段はいかに変わろうと今後も大切にしていきたいものだ、と新年の始めに思いました。(N.W)